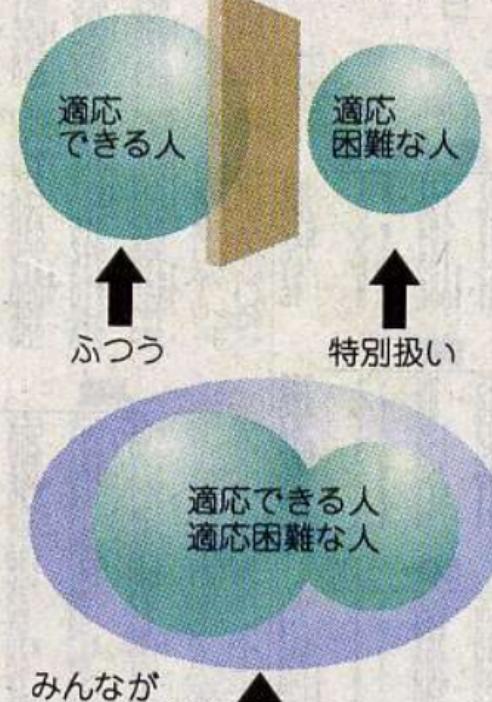


バリアフリー
の発想

ユニバーサル
の発想

特別扱いすることによる新しいバリア



「ユニバーサル・デザイン バリアフリーへの問いかけ」
(川内美彦著)をもとに作成

障壁をなくすバリアフリーと、誰もが使いやすいことを目指すユニバーサル・デザインとは何が違うのだろうか。ユニバーサル・デザインに詳しい一級建築士の川内美彦さん(49)は「バリアフリーの場合、一般の人と違う扱いをされることが多い」と指摘する。バリアフリーでは、障害者や高齢者など一部の人を対象に、障壁を除去して使いやすくするための工夫が中心だ。その際、障壁がなくなつたと

いう結果だけが重視され、そこに至る経過は無視される。この結果、新たに心のバリアが生まればかりか、製品アが生まれるばかりか、製品開発にも悪影響を及ぼすことになる。「車いす用と一般用で通路が別になつた建築や、障害のある人用で見た目は無視された商品も多い」と、川内さんは指摘する。

これに対しても、いかに特別扱いしないかという考えがユニバーサル・デザインの出発点。福祉機器のような特殊な

商品と一般向けの垣根をできることが企業の中に出でてきている「個別の消費者が様々な形で注文を付ける必要がある。そのためには、教育の現場でユニバーサル・デザインの意義を教えることも必要だ」と、

もう一度検証しようという動きが企業の中に出でてきている」と川内さんは言う。だが、ユニバーサル・デザイ

洗練された商品 「特別扱いしない」が出发点

渡辺研究員は指摘している。

念する。

ンの商品開発は、手間やコストがかかる一方で、売り上げにどこまで貢献できるかという明確な裏づけが取りにくく。機械振興協会経済研究所の渡辺博子研究員は「しっかりした理念が企業になれば、市場戦略の一手段で終わってしまう恐れもある」と懸念する。

「個別の消費者が様々な形で注文を付ける必要がある。そのためには、教育の現場でユニバーサル・デザインの意義を教えることも必要だ」と、